

九九年九月十二日、午前十時二十三分、アメリカ合衆国のケネディ宇宙センターから、ぼくたちを乗せたスペースシャトル、エンデバーが、宇宙へ向かって打ち上げられた。シャトルは、ぐんぐんとすごいスピードで上っていく。そのときのスピードは、秒速約8キロメートル。音の二十倍のスピードだ。発射四十分後、あっという間に、ぼくたちは地球から三億キロメートルのところまでやってきた。ぼくたちのシャトルは、この高さを保ちながら、地球の周りを時速三万キロメートルで回り続ける。宇宙では、人間がうかがうこともできる。それは宇宙が、「無重力」といって重さのない空間だからだ。宇宙では、重さだけでなく、上とか下とか右とか左とか、そんなことも関係なくなってしまう。君は、深い海やプールの中にもぐったことがあるだろう。無重力の世界は、そのときの感じと似ている。水にもぐると、体が水の中でふわっとうかぶ。そのとき、まるで体の重さがなくなってしまったような気がしなかっただろうか。そして、ときどき、上も下もなくなったような気がしなかっただろうか。無重力はふわふわと、とても気持ちいい。カき入れなくても、いろんなことが簡単にできる。でも、いつもういていると、ちよつとこまるときもある。そんなときのために、ゆかのあちこちにはベルトが付いている。それで体を留めて、うかないようにするのだ。無重力の中にいると、ぼくたちの体にもおかしなことがいろいろある。例えば、地球にいるときより顔がふくらんで、反対に目は細くなってしまふ。どうしてだろう。それは体の下の方にあった体液が、無重力のために頭の方へうき上がってくるからだ。でも、だいじょうぶ。二分もすればなれてきて、ちやんとふつうの顔にもどる。シャトルのまどから外をみた。地球だ。台風が雲がみえた。真ん中に丸くあながあいている。あそこが台風が目だ。あの雲の下に、どれだけの人や生き物たちがいるのだろう。宇宙からみる地球のさまざまな風景。いろんな形、いろんな模様。それをみていたぼくは、この地球の風景と、ぼくがけんび鏡でのぞいていた生き物の小さな細ぼうとが、とても似ていることに気がついた。そうなんだ。地球も生きていて一つの大きな生き物だったんだ。宇宙からみたとき、そのことがとてもよく分かった。宇宙に行つたのは、ぼくたち人間だけではない。ゴイヤカエルやハチ、植物などのいろんな生き物もいっしょに宇宙へ行つた。宇宙では、どんなことが起こるか、なぞそんなことが起こるのか、まだまだ分からないことがたくさんある。これから、もっとたくさんの人や生き物が宇宙へ行くことができるように、いろんなことを調べたり実験したりしなくてはならない。ぼくが宇宙へ行つたのは、その実験をするためだ。